

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 南琉球宮古語池間方言の疑問文イントネーション

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2023-08-09 キーワード (Ja): 疑問文, 平叙疑問文, イントネーション, 琉球諸語, 池間方言 キーワード (En): 作成者: 五十嵐, 陽介 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/0002000046">https://doi.org/10.15084/0002000046</a>

# 南琉球宮古語池間方言の疑問文イントネーション

五十嵐陽介

国立国語研究所 研究系

## 要旨

真偽疑問文（YNQ）に上昇調のイントネーション型が用いられる言語が世界の言語の圧倒的多数を占めていることが知られているが、日琉諸語には、YNQに上昇調の句末音調が用いられない方言が、琉球列島を含む地理的周辺部に報告されている。しかしながら琉球諸語に関する近年の研究成果を検討する限り、YNQに上昇調が全く現れない方言は少数であり、下降調を基本としながらも、条件によっては上昇調が用いられる方言が多数を占めるように思われる。このことは、YNQにおける上昇調/下降調という二値パラメータによって諸方言を類型化することが不可能であることを示唆する。本研究の目的は、南琉球宮古語池間方言の疑問文イントネーション体系を記述することと、諸方言における疑問文イントネーションを二値パラメータによって類型化するための枠組みを提案することにある。調査の結果、池間方言のYNQには上昇調と下降調の双方が現れること、YNQに上昇調が現れるときは必ず文末疑問標識を伴うことが明らかになった。このことは、池間方言の疑問文には形態的疑問標識が義務的であり、イントネーションは疑問標示において弁別性を有していないことを意味する。調査結果に基づいて、イントネーションの形式面、機能面の双方における方言差を、イントネーション型の分布のみから記述し、それを二値パラメータで類型化する枠組みを提案した\*。

**キーワード：**疑問文、平叙疑問文、イントネーション、琉球諸語、池間方言

## 1. はじめに

本研究の目的は、南琉球宮古語池間方言の疑問文イントネーション体系を記述することと、日琉語諸方言における疑問文イントネーションを二値パラメータによって類型化するための枠組みを提案することにある。

真偽疑問文（YNQ）に上昇調のイントネーションが用いられる言語が世界の言語の圧倒的多数を占めていることが知られている。Ultan (1978) による 53 言語を対象とした調査によると 50 言語が YNQ に上昇調を用いるという。しかしながら日琉諸語には、この類型論的傾向に反し、YNQ に下降調が用いられる言語変種（以下、方言）が報告されている（木部 2010; 五十嵐 2021）。図 1

\* 本稿は国立国語研究所第 4 期共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」（プロジェクトリーダー：浅原正幸）のサブプロジェクト「日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」（サブプロジェクトリーダー：五十嵐陽介）、および「消滅危機言語の保存研究」（プロジェクトリーダー：山田真寛）の研究成果である。

に示すように、YNQ に下降調が用いられる日琉語諸方言は、東北地方、北陸地方、九州西南部、琉球列島を中心とした地理的周辺部に偏在している<sup>1</sup>。

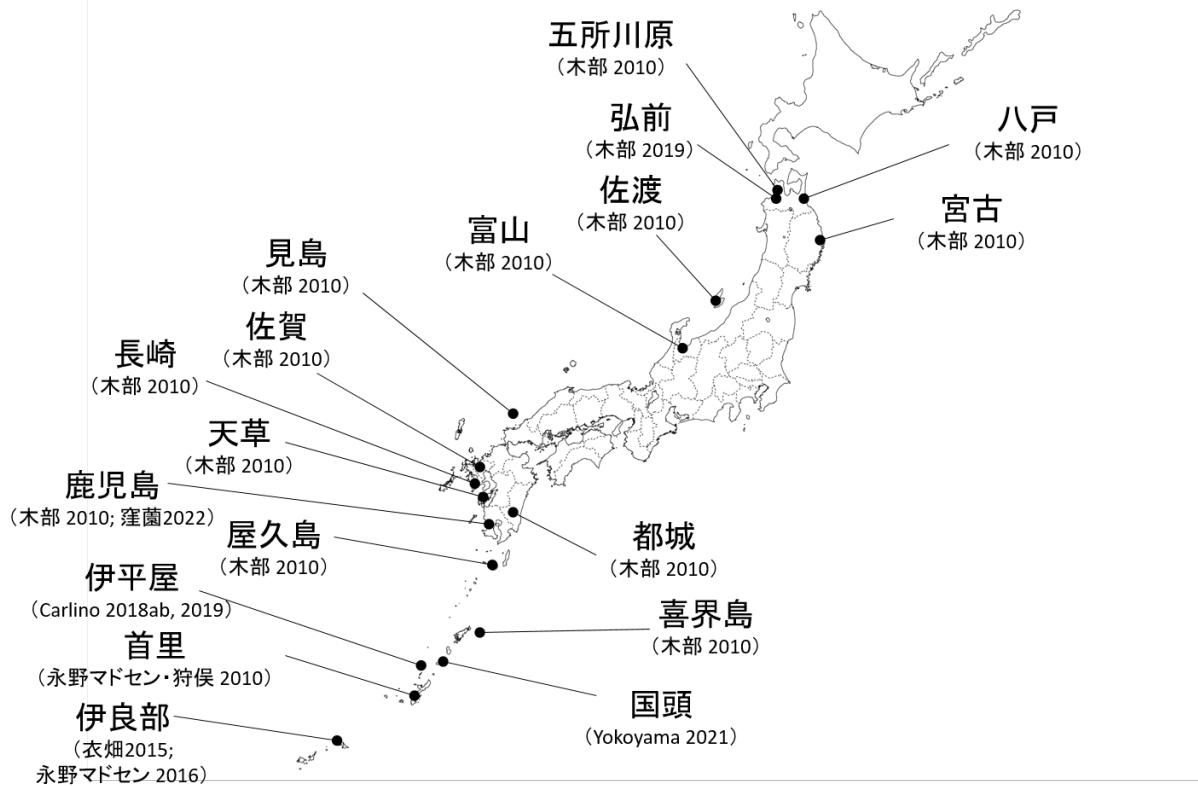


図 1 YNQ に下降調が用いられるとされる日琉語諸方言の地理的分布

しかしながら、日琉語諸方言の疑問文イントネーションを「下降調か上昇調か」というパラメータで分類する従来の枠組み (e.g. 木部 2010, 2019) には問題がないわけではない。その主要な問題点は、YNQ に下降調を用いるとされる方言の多くが、実際は上昇調も用いることがある。例えば YNQ に下降調が用いられる典型とみなされる日本語鹿児島方言でさえ、上昇調が現れることがある（木部 2019）。この場合、複数のイントネーション型のうち基本的な型を選択し、基本的な型に基づいて類型化が行われるが、基本的な型の判断基準は必ずしも明確にされていない（五十嵐 2021 参照）。同一の疑問文にイントネーション型の選択の可能性があるということは、その選択の背後にイントネーション型の機能上の差異があることを示唆するが、イントネーション型の機能を記述するための、すべての方言に共通する枠組みを提案することは容易ではない。

そこで本研究は、イントネーション型の機能面の詳細な分析を行わずに、イントネーション型の分布のみに基づいて、その機能面の差異をとらえる枠組みを提案する。以下、第 2 節では、分

<sup>1</sup> 五十嵐（2021）は日琉祖語に非上昇調の YNQ が再建される可能性を指摘している。この仮説は類型論的に珍しい体系が地理的に不連続な形で分布している事実をもっともうまく説明できる。反対に、もし祖語が上昇調の YNQ を持つならば、非上昇調の YNQ を持つ方言は類型論的に珍しい体系への変化を経験したことになる。そのような珍しい体系を持つ言語が地理的に不連続な地域に分布している事実を説明するためには、類型論的に珍しい体系への変化、すなわち生じる可能性が低い変化が、並行的に何度も生じたことを仮定せざるを得ない。したがってこの仮説はもっともらしくない。しかしながら、木部（2010）も指摘するように、日琉語諸方言のイントネーション体系に関する研究が十分でない現状において、早急な結論を導くことは慎まなければならない。

布のみに基づいて句末音調の機能を記述する方法を論じる。第3節では池間方言のイントネーション体系を調査結果に基づいて記述する。第4節ではYNQの類型論的枠組みを提案する。第5節では結論を述べる。本稿では分析対象とするイントネーション型を句末音調に限定する。本稿は句末音調を、韻律的な句の末尾（典型的には発話末）のモーラに局所的に生じる、疑問/平叙、継続/非継続等の言語情報の伝達に貢献するピッチ変化と定義する。

## 2. 分布に基づく句末音調の機能の記述

本稿は句末音調の形式面と機能面の双方における差異を扱える類型論的枠組みを提案する。形式面に関しては、従来の枠組みと同様に「上昇句末音調が用いられるか否か」という観点からの記述を行う。機能面に関しては、第1節で言及したように、句末音調の分布に基づいてその差異の記述を行う。これによって明らかにできる句末音調の機能の差異は、1) 句末音調が疑問標示において弁別的か余剰的かと、2) 句末音調が疑問標示機能以外の機能を有しているか否かである。

句末音調の機能をその分布に基づいて記述するために、本稿は文中に形態統語的疑問標識を伴う疑問文とそれを欠く疑問文を対象に、句末音調がどのように分布するかを検討する。

形態統語的疑問標識（以下、形態的疑問標識）を欠く文が平叙文ではなく疑問文として解釈されるためには、イントネーションによる疑問標示が必要となる。本稿では、形態的疑問標識を欠き、イントネーションによってのみ疑問文と解釈される文を「平叙疑問文」（declarative question）と呼ぶ。例えば、北琉球沖縄語伊平屋方言（Carlino 2018ab）（以下、伊平屋方言）には平叙疑問文がある。この方言では *ari=jajama?*（あれ=TOP 山）「あれは山か？」のような文末疑問標識を欠くYNQでは上昇句末音調が現れ、上昇句末音調が現れない平叙文 *ari=jajama.*（あれ=TOP 山）「あれは山だ。」と区別される<sup>2</sup>。換言すれば、上昇句末音調によって疑問文が平叙文から区別される。

ある方言における「平叙疑問文」の存在は、その方言における句末音調が疑問文を平叙文から区別する機能を有していることを意味する。「平叙疑問文」における句末音調は疑問標示において弁別的である。それに対して、形態的疑問標識を伴う疑問文では、疑問は形態的疑問標識によって標示されるため、句末音調は余剰的特徴となる。例えば伊平屋方言では、文末疑問標識を伴うYNQである *ari=ja jama=ru=i?*（あれ=TOP 山=FOC=YNQ）「あれは山か？」では下降句末音調が一貫して現れるが（Carlino 2018ab），この下降句末音調は疑問標示において余剰的である。このように、句末音調の分布のみに基づいて、その機能に弁別性があるか否かを明らかにすることができます。

句末音調が疑問標示機能以外の機能を有しているか否かも、句末音調の分布のみに基づいて明らかにすることができます。方言によっては、形態的疑問標識を伴う疑問文において、句末音調の選択肢がある方言がある。言い換えれば、現れる句末音調の種類が、疑問文の語彙統語的構造（アクセント型も含む）から予測不可能な方言がある。そのような方言には日本語鹿児島方言、同東

<sup>2</sup> グロスはLeipzig Glossing Rulesに従う。ただし=YNQ, =WHQはそれぞれYNQ、WHQの文末形式を表す。

京方言（木部 2019），北琉球沖縄語首里方言（永野マドセン 2013）などが含まれる。鹿児島方言では形態的疑問標識を伴う YNQ には通常下降句末音調が現れるが、上昇句末音調が現れることもある（木部 2019）。このような場合の句末音調は、疑問標示において余剰的であるだけでなく、別の機能を果たしていると考えられる。実際に、鹿児島方言では疑問文に上昇句末音調が用いられた場合、「強い応答要求などの意味」（木部 2019: 6）が加わるという。この場合、「強い応答要求」の標示・非標示が句末音調の機能とみなせる。このように、句末音調の分布のみに基づいて、その機能に疑問標示機能以外のものがあるか否かを明らかにすることができる。

このような、分布に基づく句末音調の機能面の分析を行うためには、ある方言の疑問文に典型的にみられる形態統語的構造と句末音調の組み合わせを調査するだけでは不十分である。例えば、池間方言で「これは子供か？」という YNQ をどのように言うかを母語話者にたずね、形態的疑問標識=na と下降句末音調を伴う発話 *kurjaajarabi=na?*（これ.TOP 子供=YNQ）を得て、これを記述するだけでは不十分である。調査者はこれに加えて、下降句末音調を上昇句末音調に置き換えた発話が YNQ として成立するか否かや、形態的疑問標識=na を取り除いた発話は YNQ として成立するか否かなどをたずねる必要がある。従来の日琉語諸方言の疑問文イントネーション研究では、このような手法は一般的ではなかった。第 3 節では池間方言を対象にこれを行う。

### 3. 池間方言の疑問文イントネーション体系

#### 3.1 手法

第 1 節で論じたように、疑問文イントネーションを記述するためには、第 1 に、形態的疑問標識を伴う疑問文とそれを欠く疑問文（すなわち「平叙疑問文」）を区別したうえで、「平叙疑問文」の有無を検討すること、第 2 に同一の語彙統語的構造を持つ文で句末音調の選択が可能かどうかを検討することが必要である。

句末音調と文中の形態的疑問標識との相互作用を検討するために、文中の形態的疑問標識をコントロールしたテスト文を用いた。形態的疑問標識には疑問詞と文末疑問標識がある（1）。疑問詞を伴う疑問文を疑問詞疑問文（WHQ）と呼ぶ。池間方言における文末疑問標識は YNQ の場合=na であり、WHQ の場合=ga である（林 2013）。（以下、語の語彙的なアクセント型（後述）を表すアルファベットを語の冒頭に上付き文字で示す。）

##### (1) 形態的疑問標識

- a. 疑問詞  $^A\text{taru}$  「誰」  $^C\text{nau}$  「何」  $^A\text{idi}$  「どれ」 等
- b. 文末疑問標識 =na (YNQ) =ga (WHQ)

本稿では、(2) の 5 種類の疑問文を分析対象とする。(2b) が平叙疑問文にあたる。

##### (2) 分析対象となる文の種類とその例

- a. 平叙文  $\text{kurjaajarabi.}$  「これは子供だ。」

- b. YNQ (文末疑問標識無し) kurjaa jarabi? 「これは子供か？」 (平叙疑問文)  
c. YNQ (文末疑問標識有り) kurjaa jarabi=na? 「これは子供か？」  
d. WHQ (文末疑問標識無し) idi=ga=du jarabi? 「どのが子供だ？」  
e. WHQ (文末疑問標識有り) idi=ga=du jarabi=ga? 「どのが子供だ？」

同一の語彙統語的構造を持つ文で句末音調の選択が可能かどうかを検討するために、ある疑問文に生じた句末音調を別の疑問文の句末音調と入れ替えて、当該の文が可能であるか否かを話者にたずねた。例えば、文末疑問標識を伴う WHQ (2e) において上昇句末音調が観察され、かつ文末疑問標識を欠く WHQ (2d) において上昇句末音調が観察されなかった場合、(2e) が上昇句末音調無しで発話可能であるか否か、(2d) が上昇句末音調有りで発話可能であるか否かを話者にたずねるなどした。

文中の形態的疑問標識と句末音調だけでなく、文末（文末疑問標識がある場合はその直前の）語のアクセントのコントロールも行った。Yokoyama (2021) が北琉球奄美語沖永良部島国頭方言について明らかにしたように、文末の語のアクセント型は句末境界音調の選択に効果を与えることがあるので、そのコントロールは重要である。また、アクセント型のコントロールは、音調に対するイントネーションの効果とアクセントの効果とを峻別するためにも重要である。池間方言には 3 種類のアクセント型 (A 型, B 型, C 型) がある (Igarashi et al. 2011; 五十嵐他 2012)。池間方言のアクセント体系は極めて複雑であり、アクセント型は広範な環境で中和する (五十嵐 2016ab)。アクセント体系の包括的な記述は紙面の都合上、本稿では行わない。

話者は南琉球宮古語池間方言西原変種の母語話者 1 名 (1947 年生まれ、男性) であった。

## 3.2 結果

### 3.2.1 文末疑問標識を伴う YNQ, WHQ

文末疑問標識を伴う YNQ と WHQ では、双方ともに、上昇句末音調を伴う発話と、それを欠く発話の双方が可能である (3) (図 2-3)。文末疑問標識の直前の語のアクセント型は上昇句末音調の生起に効果を与えない。

- (3) a. YNQ    **ku<sup>1</sup>rja<sup>1</sup>a**    **mu<sup>1</sup>zi<sup>1</sup>guruna?**  
**ku<sup>1</sup>rja<sup>1</sup>a**    **mu<sup>1</sup>zi<sup>1</sup>guru<sup>1</sup>na?**  
<sup>A</sup>kurjaa              <sup>B</sup>muzi+guru=na?  
これ.TOP              麦+殻=YNQ  
「これは麦の茎か？」
- b. WHQ    **i<sup>1</sup>di<sup>1</sup>gadu**    **mu<sup>1</sup>zi<sup>1</sup>guruga?**  
**i<sup>1</sup>di<sup>1</sup>gadu**    **mu<sup>1</sup>zi<sup>1</sup>guru<sup>1</sup>ga?**  
<sup>A</sup>idi=ga=du              <sup>B</sup>muzi+guru=ga?  
どれ=NOM=FOC    麦+殻=WHQ  
「どのが麦の茎だ？」

話者によると上昇句末音調の有無によって伝達される情報が変わることはないという。句末音調の有無は、自問（自分自身に対する問い合わせ）と質問（聞き手に対する問い合わせ）の区別とは無関係である。また、聞き手との親疎、発話の丁寧さ、文の命題の真偽に対する話し手の確信度（および話し手が想定する聞き手の確信度）等の要因が上昇句末音調の有無に効果を与えるという証拠も得られていない。上昇句末音調の有無がどのような機能を果たしているかを明らかにすることは今後の課題である。

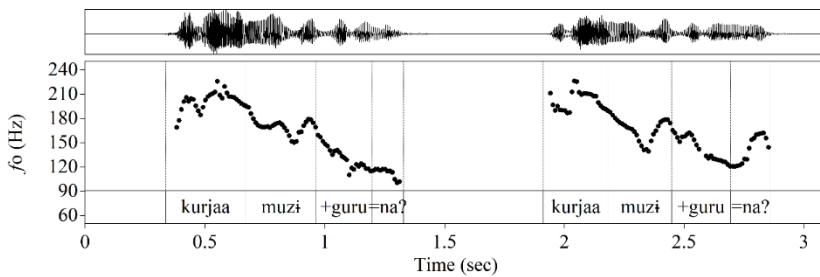


図2 上昇句末音調を欠くYNQ（左）とそれを伴うYNQ（右）（3a）の音声波形と $f_0$ 曲線

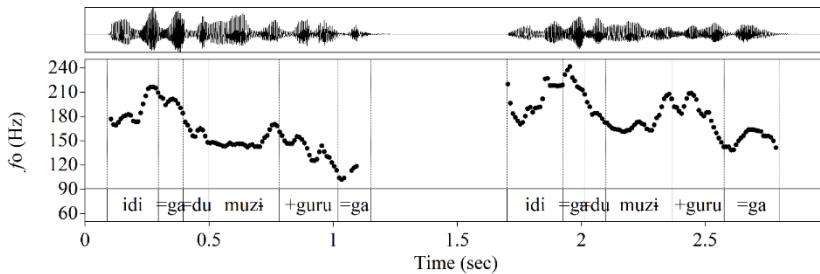


図3 上昇句末音調を欠くWHQ（左）とそれを伴うWHQ（右）（3b）音声波形と $f_0$ 曲線

### 3.2.2 文末疑問標識を欠くWHQ

文末疑問標識を伴わないWHQには句末上昇音調は決して現れない(4)(図4)。また、文末疑問標識の直前の語のアクセント型は句末音調の生起に効果を与えない。

(4)	WHQ	<b>i<sup>1</sup>d<sup>1</sup>i<sup>1</sup>gadu</b>	<b>mu<sup>1</sup>zi<sup>1</sup>guru?</b>
		<sup>A</sup> idi=ga=du	<sup>B</sup> muzi+guru?
		どれ=NOM=FOC	麦+殻
「どのが麦の茎だ？」			

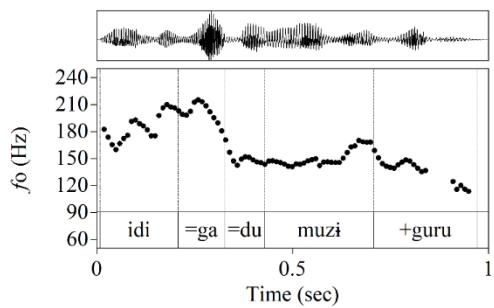


図 4 文末疑問標識を欠く WHQ (4) 音声波形と  $f_0$  曲線

### 3.2.3 文末疑問標識を欠く YNQ (平叙疑問文)

話者によると、文末疑問標識を欠く YNQ は可能であるという。(5) に示すように、文末疑問標識を欠く YNQ には上昇句末音調は決して用いられない。平叙文 (5a) と文末疑問標識を欠く YNQ (5b) は句末音調によって区別されない。

- (5) a. 文末 A 型 平叙文 **u<sup>t</sup>c<sup>i</sup>naan<sup>t</sup>kaija<sup>t</sup>** **ika<sup>t</sup>n.**  
                   <sup>c</sup>ucinaa=nkai=ja      <sup>A</sup>ik-an.  
                   沖縄=ALL=TOP      行く-NEG  
                   「沖縄には行くない。」
- b. 文末 A 型 YNQ **u<sup>t</sup>c<sup>i</sup>naan<sup>t</sup>kaija<sup>t</sup>** **ika<sup>t</sup>n?**  
                   <sup>c</sup>ucinaa=nkai=ja      <sup>A</sup>ik-an.  
                   沖縄=ALL=TOP      行く-NEG  
                   「沖縄には行くないか？」

(5) の文末の語のアクセント型は A 型であるが、文末疑問標識を欠く YNQ には上昇句末音調は決して用いられない事実は文末の語が B 型、C 型である (6) からも確認できる。

- (6) a. 文末 B 型 平叙文 **ku'rjaa<sup>1</sup>** **tama<sup>1</sup>na.**  
                   <sup>A</sup>kurjaa              <sup>B</sup>tamana.  
                   これ.TOP          キャベツ  
                   「これはキャベツだ。」
- b. 文末 B 型 YNQ **ku'rjaa<sup>1</sup>** **tama<sup>1</sup>na.**  
                   <sup>A</sup>kurjaa              <sup>B</sup>tamana.  
                   これ.TOP          キャベツ  
                   「これはキャベツか？」
- c. 文末 C 型 平叙文 **ku'rjaa<sup>1</sup>** **jarabi.**  
                   <sup>A</sup>kurjaa              <sup>C</sup>jarabi.  
                   これ.TOP          子供  
                   「これは子供だ。」
- d. 文末 C 型 YNQ **ku'rjaa<sup>1</sup>** **jarabi?**  
                   <sup>A</sup>kurjaa              <sup>C</sup>jarabi?  
                   これ.TOP          子供  
                   「これは子供か？」

図 5-7 に示すように、基本周波数 ( $f_0$ ) 曲線の形状に局所的な差異は明確に認められない。平叙文と YNQ との間の差異は、全体的なピッチレンジ (pitch range) に認められる。具体的には、平叙文より YNQ の方がピッチレンジの上限が高い<sup>3</sup>。

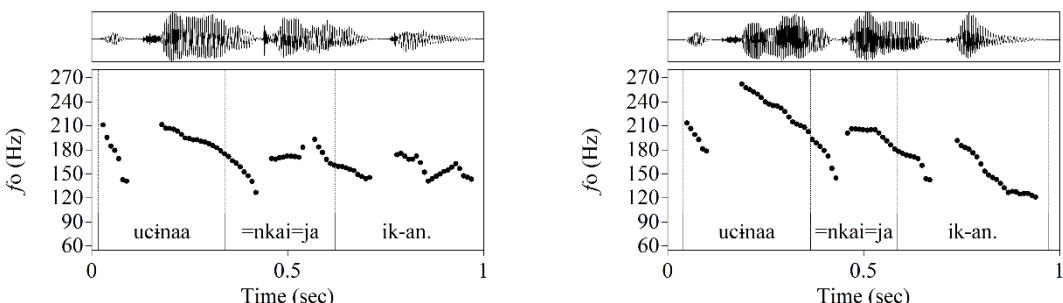


図 5 平叙文 (5a) (左) と文末疑問標識を伴わない YNQ (5b) (右) の音声波形と  $f_0$  曲線

<sup>3</sup> そのほかに、YNQ では文末の語が平叙文より明瞭に調音される傾向がある。その傾向は図 5-7 における文末語の音声波形の振幅が平叙文より YNQ のほうが大きいことからも確認できる。明瞭な調音は母音の無声化にも影響を与える。例えば、*vva=gazzaa=auug-ai=dusi* (2sg=GEN 父=TOP 泳ぐ-可能=FOC) 「お前の父親は泳げる」の文末モーラは平叙文では通常、無声化するが、YNQ では無声化しない傾向がある。さらに YNQ では文末モーラの長音化が見られることがあるが、長音化は文末に形態的疑問標識を伴った YNQ でも観察される。いずれの場合でも長音化は必須ではない。

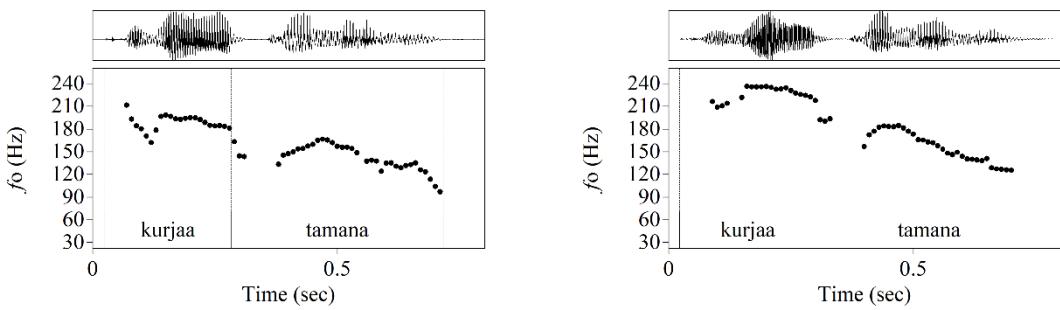


図 6 平叙文 (6a) (左) と文末疑問標識を伴わない YNQ (6b) (右) の音声波形と  $f_0$  曲線

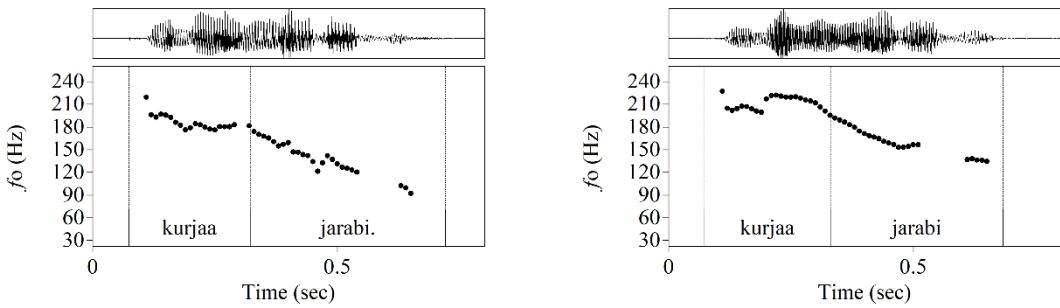


図 7 平叙文 (6c) (左) と文末疑問標識を伴わない YNQ (6d) (右) の音声波形と  $f_0$  曲線

この違いは異なる 2 種類の音韻構造の反映であろうか。それとも同一の音韻構造の異なる音声実現であろうか。ピッチの違いによって異なる情報が伝達される事実は、必ずしも異なる音韻構造の存在の証拠にならない (Ladd 1996; Gussenhoven 2004)。例えば、同一のイントネーション型のピッチレンジを段階的に拡大した場合、それと相関する強さの強調 (emphasis) が伝達されることがある。言語記号における音と意味とは離散的 (discrete) に構造化されていることを考慮すれば、音と意味との関係が連続的 (gradient) である情報伝達は、言語の一部をなさないパラ言語的な情報伝達とみなすことができる (Gussenhoven 2004)。したがって、パラ言語的な情報伝達から言語的な意味伝達を区別するためには、音と意味の間の関係が離散的であるか否かを検討する必要がある。もしそれが連続的であるならば（例えばピッチが高くなれば高くなるほど「疑問」と解釈される可能性が高まるならば）、音韻論的なイントネーション型は 1 つであり、それが異なる形で音声的に実現されたと解釈される。もしそれが離散的であるならば、（例えばピッチがある閾値を超えたときに文の解釈が平叙から疑間に切り替わるのならば）、2 種類の音韻論的なイントネーション型が認められる。

音（ピッチレンジ）と意味（疑問・平叙）の間が離散的に構造化されているか否かの本格的な検討は本稿の射程を超える。本稿では、(5a, 6ac) と (5b, 6bd) がピッチレンジの差異を除けば、 $f_0$  曲線に局所的な形状の差異が明確に認められない点を重視し、両者は同一の音韻構造を持つと解釈する。したがって、たとえ (5b, 6bd) が疑問の意図を伝達したとしても、その伝達はパラ言語的手段によるものであって、(5b, 6bd) は言語構造上平叙文であると解釈する。

以上から池間方言には「平叙疑問文」は存在しないと結論する<sup>4</sup>。

### 3.2.4 非上昇調をとる疑問文の句末音調

上昇句末音調を伴わない文はすべて下降句末音調を持つのだろうか。(7) の文末疑問標識を伴った WHQ を検討するとそうではないことがわかる。

(7)	a.	文末 A 型	WHQ	$u^{\prime}nu^{\prime}$	sjasin	$uc^{\prime}cjuu^{\prime}$	hituu	$ta^{\prime}ru^{\prime}ga?$ Ø%
				$u^{\prime}nu^{\prime}$	sjasin	$uc^{\prime}cjuu^{\prime}$	hituu	$ta^{\prime}ru^{\prime\prime}ga?$ H%
				<sup>A</sup> unu	<sup>C</sup> sjasin	<sup>C</sup> uccj+uu	<sup>A</sup> hitu=u	<sup>A</sup> taru=ga?
				この	写真.DAT	写る+PROG	人=TOP	誰=WHQ
				「この写真に写っている人は誰だ？」				
	b.	文末 C 型	WHQ	$u^{\prime}nu^{\prime}$	sjasin	$uc^{\prime}cjuu^{\prime}$	$munu$	$^{\prime}nauga?$ Ø%
				$u^{\prime}nu^{\prime}$	sjasin	$uc^{\prime}cjuu^{\prime}$	$munu$	$^{\prime}nau^{\prime}ga?$ H%
				<sup>A</sup> unu	<sup>C</sup> sjasin	<sup>C</sup> uccj+uu	<sup>B</sup> munu=u	<sup>C</sup> nau=ga?
				この	写真.DAT	写る+PROG	物=TOP	何=WHQ
				「この写真に写っているものは何だ？」				

上昇句末音調を伴わない WHQ では、文末疑問標識の直前の名詞のアクセント型によって、文末疑問標識のピッチが異なる。当該名詞が A 型の <sup>A</sup>taru=ga 「誰」の場合は文末疑問標識の直前に下がり目があるのに対して、当該名詞が C 型の <sup>C</sup>nau=ga 「何」の場合は下がり目がない。したがって、上昇句末音調を伴わない WHQ に一様に下降句末音調 L% を認めるることはできない。

重要なことに、文末に位置する <sup>A</sup>taru=ga 「誰」と <sup>C</sup>nau=ga 「何」の実現は、1 モーラ格助詞を伴った、同じアクセント型を持つ 2 モーラ名詞 <sup>A</sup>butu=nu 「夫の」と <sup>C</sup>nabi=nu 「鍋の」の発話末での実現と同一である。2 モーラ・3 モーラ名詞の発話末の実現、および 1 モーラ助詞を伴った同じ名詞の発話末の実現を (8) に示す<sup>5</sup>。

<sup>4</sup> 形態的疑問標識を欠く YNQ のピッチレンジの拡大は鹿児島方言にも観察される（窪薙 2021）。形態的疑問標識を欠く YNQ と平叙文の双方に上昇句末音調が現れない点も池間方言と同様である。しかし鹿児島方言の場合は池間方言の場合と異なり、平叙文と YNQ のピッチパタンは離散的に異なる音韻構造の反映と解釈できる証拠がある。鹿児島方言で対立する 2 種類のアクセント型 (A 型, B 型) のうち語末音節が低い A 型を持つ語が文末に位置する場合、文末音節は平叙文と YNQ の双方とも低くなり、両者の違いはピッチレンジの差として現れる。それに対して、語末音節が高い B 型を持つ語が文末に位置する YNQ は、最終音節においてアクセントによる上昇のあと、下降句末音調 L% による下降が生じる。この下降は平叙文には生じない。したがって、鹿児島方言の平叙文は句末音調を持たないが、YNQ は下降句末音調を持つと解釈できる。

<sup>5</sup> 池間方言には「韻律語」と呼ばれる韻律単位が認められ（五十嵐 2016a），2 モーラ以上の名詞語根は 1 つの韻律語を形成する。1 モーラ助詞は韻律語を形成せず先行する韻律語に融合される。（ただし文末疑問標識を含む一部の文末助詞はこれの例外となり独自の韻律語を形成する可能性がある。）フットは韻律語を領域として形成され、左から右へと 2 モーラずつ 1 フットを形成する。余ったモーラは先行フットに融合し 3 モーラフットを形成する。韻律語境界を“( )”，フット境界を“<>”で表すと、(8) の A 型名詞のフット構造は (<butu>)，(<butunu>)，(<nagaju>)，(<naga><junu>)となる。1 フット韻律語 1 つからなる語の単独発話においては A 型と B 型が中和する。2 フット韻律語 1 つからなる語の単独発話においてはすべての型が中和する。

(8)	a.	A型	<b>'bu'tu.</b>	<b>bu'tu'nu.</b>	<b>na'ga'ju.</b>	<b>na'ga'junu.</b>
			<sup>A</sup> butu.	<sup>A</sup> butu=nu.	<sup>A</sup> nagaju.	<sup>A</sup> nagaju=nu.
			夫	夫=GEN	ボラ	ボラ=GEN
	b.	B型	<b>'ma'ju.</b>	<b>ma'ju'nu.</b>	<b>ta'ma'na.</b>	<b>ta'ma'nanu.</b>
			<sup>B</sup> maju	<sup>B</sup> maju=nu.	<sup>B</sup> tamana	<sup>B</sup> tamana=nu.
			猫	猫=GEN	キャベツ	キャベツ=GEN
	c.	C型	<b>na'bi.</b>	<b>na'binu.</b>	<b>ja'rabi.</b>	<b>ja'ra'binu.</b>
			<sup>C</sup> nabi.	<sup>C</sup> nabi=nu.	<sup>C</sup> jarabi.	<sup>C</sup> jarabi=nu.
			鍋	鍋=GEN	子供	子供=GEN

以上から、上昇句末音調 H% を伴わない WHQ における文末疑問標識 =ga の直前の下がり目は、句末音調によるものではなく、発話末に位置した語のアクセントによるものとみなすことができる。このような疑問文は句末音調を欠くと解釈される。これを無音調 (ø%) と名付けよう。

それに対して、文末疑問標識 =na を持つ YNQ で、上昇句末音調 H% を伴わないものは、文末に位置する語のアクセントに関わらず、文末疑問標識が必ず低く実現される (9)。

(9)	a.	YNQ	<b>ku'rjaal'</b>	<b>vvaga'</b>	<b>fautai</b>	<b>na'gaju'na? L%</b>
			<sup>A</sup> kurjaal	<sup>A</sup> vva=ga	<sup>A</sup> fau-tai	<sup>A</sup> nagaju=na?
			これ.TOP	2sg=NOM	食べる-PST	ボラ=YNQ
「これはお前が食べたボラか？」						
	b.	YNQ	<b>ku'rjaal'</b>	<b>vvaga'</b>	<b>fautai</b>	<b>ta'mana'na? L%</b>
			<sup>A</sup> kurjaal	<sup>A</sup> vva=ga	<sup>A</sup> fau-tai	<sup>B</sup> tamana=na?
			これ.TOP	2sg=NOM	食べる-PST	キャベツ=YNQ
「これはお前が食べたキャベツか？」						
	c.	YNQ	<b>ku'rjaal'</b>	<b>vvaga'</b>	<b>fautai</b>	<b>zi'mami'na? L%</b>
			<sup>A</sup> kurjaal	<sup>A</sup> vva=ga	<sup>A</sup> fau-tai	<sup>C</sup> zimami=na?
			これ.TOP	2sg=NOM	食べる-PST	落花生=YNQ
「これはお前が食べた落花生か？」						

(9) における文末の名詞の実現は、1 モーラ格助詞を伴う 3 モーラ名詞の発話末における実現とは異なる<sup>6</sup>。ここから以下の 2 つが明らかになる。第 1 に、文末疑問標識 =na の低ピッチは語ア

<sup>6</sup> (9)において =na を伴った名詞のアクセント型がすべて中和している。2 モーラ・3 モーラの単純語（すなわち 1 フット韻律語を 1 つ形成する語）が発話末に置かれた場合は、C 型はほかの型と中和しないことを考慮すると、それが =na を伴った場合の中和には特別の説明が必要である。この中和を =na の直接の作用によるものとはみなせない。2 つの語根からなる複合語（2 つの韻律語を形成する語）、例えば <sup>A</sup>cimi+guru「糸を巻く筒」、<sup>B</sup>muzi+guru「麦の茎」、<sup>C</sup>buuzzi+guru「サトウキビの茎」では、**ci'mi'guruna**、**mu'zi'guruna**、**'buuzzi+guru'na** のようになり、C 型とほかの型とが区別される。3 つの語根からなる複合語（3 つの韻律語を形成する語）、例えば <sup>A</sup>kadi+fuci+ami「台風の前兆の雨」、<sup>A</sup>nn+ni+nabi「芋を煮る鍋」、<sup>C</sup>jui+fau+busi「一番星」では、**ka'di'fuciamina**、**'nn'niina'b'i'na**、

クセントによるものとはみなせない。本稿ではこの低ピッチを、下降句末音調（L%）によるものとみなす。第2に文末疑問標識=naは、1モーラ格助詞および文末疑問標識=gaと韻律上異なるふるまいを見せるという点である。紙面の都合上詳細な議論は省くが、本稿では、文末疑問標識=naは1モーラ形態素としては例外的に独立の韻律的単位、具体的には、韻律語（五十嵐2016a）を形成すると解釈する<sup>7</sup>。文末疑問標識が独立の韻律的単位を形成する現象は、鹿児島方言（木部2000、窪薙2021）、国頭方言（Yokoyama 2021）、北琉球奄美語喜界島諸方言（白田2022）に報告されている。

下降句末音調（L%）と無音調（ø%）の違いは、3モーラ語が文末に位置するYNQとWHQに顕著に認められる（10）。

(10)	a.	YNQ	<b>ku<sup>1</sup>rja<sup>1</sup></b>	<b>vvaga<sup>1</sup></b>	<b>fautai</b>	<b>ta<sup>1</sup>mana<sup>1</sup>na? L%</b>
			<sup>A</sup> kurja <sup>a</sup>	<sup>A</sup> vva=ga	<sup>A</sup> fau-tai	<sup>B</sup> tamana=na?
			これ.TOP	2sg=NOM	食べる-PST	キャベツ=YNQ
「これはお前が食べたキャベツか？」						
b.	WHQ	YNQ	<b>ku<sup>1</sup>rja<sup>1</sup></b>	<b>taruga<sup>1</sup></b>	<b>fautai</b>	<b>ta<sup>1</sup>ma<sup>1</sup>naga? ø%</b>
			<sup>A</sup> kurja <sup>a</sup>	<sup>A</sup> taru=ga	<sup>A</sup> fau-tai	<sup>B</sup> tamana=na?
			これ.TOP	誰=NOM	食べる-PST	キャベツ=YNQ
「これは誰が食べたキャベツか？」						

<sup>B</sup>tamana「キャベツ」における下がり目はYNQ（10a）とWHQ（10b）とで異なる。WHQ（10b）における<sup>B</sup>tamana=gaの実現は、格助詞を伴う3モーラ名詞<sup>B</sup>tamana=nuの発話末の実現と同一である。したがって<sup>B</sup>tamana=gaにおける第2モーラの下がり目はアクセントによるものであると言える。それに対してYNQ（10a）における<sup>B</sup>tamana=naの実現はアクセントによるものとみなすことはできず、下降句末音調L%によるものとみなさざるをえない<sup>8</sup>。

最後に平叙文の句末音調がL%なのかø%なのかを検討しよう。（11）に示すように、平叙文の末尾の名詞のアクセント型がA型、B型の場合は文末モーラが低ピッチであるが（11ab），C型

<sup>7</sup>juifau<sup>1</sup>businaのようにになり、中和が生じない。複合語が=naを伴った場合の中和パターンは、=naを伴わない場合と全く同一である。したがって特別な中和が生じるのは=naの前に1フット韻律語を形成する単純語が先行する場合である。この問題は本文に示したように、文末疑問標識=naは、文末疑問標識=gaとは異なり、先行韻律語に融合せず、独自の韻律語を形成すると仮定すれば、解決される。

<sup>8</sup>（9）における=naを伴う3モーラ名詞の実現は、3モーラ名詞に独立の韻律語を形成する形態素が現れた場合の実現と同一であり、このことは=naが独立の韻律語を形成するとする見解を支持する。独立の韻律語を形成する形態素には2モーラ助詞（=mai「も」、=kara「から」）があるが、これが後続した場合の3モーラ名詞の実現は、A型は(<na<sup>1</sup>gaju>)(<<sup>1</sup>mai>)、B型は(<ta<sup>1</sup>mana>)(<<sup>1</sup>mai>)、C型は(<zi<sup>1</sup>mami>)(<ma<sup>1</sup>i>)のようになる。すなわちいずれも名詞内部で下降が生じず、この点で=naが後続した場合と同一となる。2モーラ助詞と=naの違いは、前者では助詞のピッチによってC型とそれ以外の型が区別されるが、後者では区別されない点にある。これは=naに付与された句末音調によって音調が上書きされ、アクセント型が中和したと説明される。

<sup>9</sup>文末疑問標識=naを伴った<sup>B</sup>tamana=naの韻律構造は、=naが独自の韻律語を形成するので、(<ta<sup>1</sup>mana>)(<<sup>1</sup>na>)となる。文末疑問標識=gaを伴った<sup>B</sup>tamana=ga?の韻律構造は、=gaが独自の韻律語を形成しないので、(<ta<sup>1</sup>ma><<sup>1</sup>naga>)となる。この構造は、同じく独自の韻律語を形成しない属格の=nuを伴った<sup>B</sup>tamana=nuの韻律構造(<ta<sup>1</sup>ma><<sup>1</sup>nanu>)と同一である。

の場合のみ文末モーラが低ピッチではない (11c)。したがって平叙文に句末音調 L%が生じいるとみなすことはできない。これらの語の実現は、2 モーラ名詞単独発話の実現と同一であるため、文末モーラのピッチはアクセント型によるものであるとみなすことができる。したがって平叙文の句末音調はø%である。

- (11) a. 平叙文 **u<sup>1</sup>nu<sup>1</sup>** **sjasin** **uc<sup>1</sup>cjuu<sup>1</sup>** **hituu** **'ju<sup>1</sup>mi.** ø%
- <sup>A</sup>unu <sup>C</sup>sjasin <sup>C</sup>uccj+uu <sup>A</sup>hitu=u <sup>A</sup>jumi.  
この 写真.DAT 写る+PROG 人=TOP 嫁  
「この写真に写っている人は嫁だ。」
- b. 平叙文 **u<sup>1</sup>nu<sup>1</sup>** **sjasin** **uc<sup>1</sup>cjuu<sup>1</sup>** **munuu** **'ma<sup>1</sup>mi.** ø%
- <sup>A</sup>unu <sup>C</sup>sjasin <sup>C</sup>uccj+uu <sup>B</sup>munu=u <sup>B</sup>mami.  
この 写真.DAT 写る+PROG 物=TOP 豆  
「この写真に写っているものは豆だ。」
- c. 平叙文 **u<sup>1</sup>nu<sup>1</sup>** **sjasin** **uc<sup>1</sup>cjuu<sup>1</sup>** **munuu** **na<sup>1</sup>bi.** ø%
- <sup>A</sup>unu <sup>C</sup>sjasin <sup>C</sup>uccj+uu <sup>B</sup>munu=u <sup>C</sup>nabi.  
この 写真.DAT 写る+PROG 物=TOP 鍋  
「この写真に写っているものは鍋だ。」

### 3.3 考察

文中の疑問標識と上昇句末音調との関係は表 1 の形に要約することができる。表から、上昇句末音調 H%が生じる時は必ず文末疑問標識があるという規則性があることがわかる。一方で、文末疑問標識は必ずしも上昇句末音調 H%を要求しない。すなわち、疑問文における上昇句末音調 H%は任意である。また、池間方言は形態的疑問標識を欠く文において疑問を標示する言語的手段を欠く。すなわち池間方言は「平叙疑問文」を欠く。

表 1 池間方言の疑問文イントネーション体系の要約

		疑問詞	文末疑問標識	上昇句末音調
平叙文	<b>ku<sup>1</sup>rja=a<sup>1</sup> mu<sup>1</sup>zi<sup>1</sup>+guru.</b>	ø%		
YNQ	<b>ku<sup>1</sup>rja=a<sup>1</sup> mu<sup>1</sup>zi<sup>1</sup>+guru=na?</b>	L%	✓	
YNQ	<b>ku<sup>1</sup>rja=a<sup>1</sup> mu<sup>1</sup>zi<sup>1</sup>+guru='na?</b>	H%	✓	✓
WHQ	<b>i<sup>1</sup>di<sup>1</sup>=ga=du mu<sup>1</sup>zi<sup>1</sup>+guru?</b>	ø%	✓	
WHQ	<b>i<sup>1</sup>di<sup>1</sup>=ga=du mu<sup>1</sup>zi<sup>1</sup>+guru=ga?</b>	ø%	✓	✓
WHQ	<b>i<sup>1</sup>di<sup>1</sup>=ga=du mu<sup>1</sup>zi<sup>1</sup>+guru='ga?</b>	H%	✓	✓

疑問標示機能という観点からは、池間方言の句末音調は、平叙疑問文を持たないので弁別的ではない。また、形態的疑問標識を伴う疑問文において上昇句末音調の有無という選択肢が存在していることから、句末音調は疑問標示以外の機能を担っているとみなせる。

#### 4. 日琉語諸方言疑問文イントネーションの類型論構築に向けて

##### 4.1 4種類のパラメータ

第2節で論じたように本稿では、疑問文イントネーションの形式面と機能面の方言差に基づいて諸方言を分類するために、単純に下降調か上昇調かという観点から方言を分類するのではなく、句末音調が疑問標示において弁別的であるか否か、句末音調が疑問標示以外の機能を持つか否かという観点から分類する。

本稿は、YNQに限定して、(12)の4種類のパラメータによって疑問文イントネーションを類型化する枠組みを提案する。(12ad)は機能面からの分類、(12bc)は形式面からの分類を行うためのパラメータである。

- (12) a. [±DQ]: 形態的疑問標識を欠く YNQ が可能か否か  
b. [±RiseDQ]: 形態的疑問標識を欠く YNQ に上昇句末音調が現れるか否か  
c. [±RiseMQ]: 形態論的疑問標識を伴う YNQ で上昇句末音調は可能か否か  
d. [±ChoiceMQ]: 形態的疑問標識を伴う YNQ で句末音調に選択肢があるか否か

以下に4種類のパラメータを詳述する。分類の対象となる方言は、池間方言のほかに、北琉球宮古語伊良部島伊良部方言（衣畑 2020），北琉球奄美語喜界島小野津方言（白田 2022），同上嘉鉄方言（白田 2022），北琉球奄美語沖永良部島国頭方言（Yokoyama 2021），北琉球沖縄語伊平屋方言（Carlino 2018ab），日本語鹿児島方言（木部 2019；窪薙 2021）と東京方言（木部 2019）である。

###### 4.1.1 [±DQ]: 形態的疑問標識を欠く YNQ が可能か否か

[±DQ] (*Declarative Question*) は「平叙疑問文」が可能か否かを表す。先行研究を検討する限り、琉球語諸方言には YNQ に形態的疑問標識が必須であるものが多い。池間方言もその1つである。これらの方言は[-DQ]である。鹿児島方言の YNQ には形態的疑問標識が「必須で、これを欠く文は不自然と感じられる」（木部 2019: 6）と記述されることがあるが、窪薙（2021）によると形態的疑問標識を欠く YNQ、すなわち「平叙疑問文」は可能である。したがって鹿児島方言は[+DQ]である（13）。

- (13) a. [+DQ] 国頭、伊平屋、鹿児島、東京  
b. [-DQ] 伊良部、小野津、上嘉鉄、池間、首里

このパラメータによって、句末音調が疑問標示において弁別的か否かを表現することができる。 [+DQ] の国頭方言、伊平屋方言、鹿児島方言、東京方言は、句末音調が平叙文から疑問文を区別する弁別機能を有するが、[-DQ] の方言はそうではない。

#### 4.1.2 [±RiseDQ]: 形態的疑問標示を欠く YNQ に上昇句末音調が現れるか否か

[±RiseDQ] (*Rise in Declarative Question*) は [+DQ] を持つ方言にのみ適用され、「平叙疑問文」において上昇句末音調が可能か否かを表す。私の知る限り、鹿児島方言が唯一 [-RiseDQ] を持つ(14)。

- (14) a. [+RiseDQ] 国頭、伊平屋、東京  
b. [-RiseDQ] 鹿児島

このパラメータは、平叙文から疑問文を区別する弁別機能を有するのが上昇句末音調である方言とそうでない方言を区別することができる。鹿児島方言は上昇句末音調がこの機能を欠く体系を持つ。鹿児島方言の疑問文では下降句末音調が用いられ、語末モーラの急激な下降が実現されるが、平叙文はこの急激な下降を欠く(窪薙 2021)。したがって鹿児島方言は下降句末音調が疑問標示において弁別的となる。世界の多くの言語において上昇調が YNQ と結びつくことを考慮すれば、鹿児島方言は類型論的に珍しい体系を有すると言える。

国頭方言は [+RiseDQ] であるが、上昇句末音調が「平叙疑問文」に現れるのは文末の語のアクセント型が特定のアクセント型の場合のみであり、それ以外の場合は下降句末音調が現れる(Yokoyama 2021)。この点において国頭方言は鹿児島方言に近いが、上昇句末音調が平叙文から疑問文を区別する機能を有している点は鹿児島方言とは明確に異なる。

#### 4.1.3 [±RiseMQ]: 疑問標識を伴う YNQ で上昇句末音調は可能か否か

このパラメータ (*Rise in Morphologically-marked Questions, [±RiseMQ]*) が負である方言は疑問標識を伴う YNQ に決して上昇句末音調が現れない方言である。従来、「疑問文に下降調が用いられる」方言の典型とみなされてきた鹿児島方言(木部 2019)は、上昇調が現れることがある(木部 2019), [+RiseMQ] となる(15)。

- (15) a. [+RiseMQ] 上嘉鉄、池間、首里、鹿児島、東京  
b. [-RiseMQ] 伊良部、小野津、国頭、伊平屋

このパラメータによって類型論的に珍しい体系を区別することができる。[-RiseMQ] を持つ伊良部方言、小野津方言、国頭方言、伊平屋方言は、先行研究の記述に基づく限り、疑問標識を伴う YNQ に上昇調が現れない方言であり、類型論的に珍しい体系であると言える。

このパラメータは、疑問標識を伴う YNQ で上昇句末音調が可能か否かを表すものであるので、このパラメータが正であることは上昇句末音調が必ず用いされることを意味しない。上昇句末音

調が必須であるか否かは別のパラメータ、すなわち[±ChoiceMQ]との組み合わせによって表現される。またこのパラメータが正であることは、上昇句末音調が非上昇句末音調より典型的であることを意味しない。例えば鹿児島方言は[+RiseMQ]だが、疑問標識を伴う YNQ では上昇句末音調は典型的ではない（木部 2019）。

#### 4.1.4 [±ChoiceMQ]: 形態的疑問標識を伴う YNQ で句末音調に選択肢があるか否か

パラメータ[±ChoiceMQ] (*Choice in boundary tones in Morphologically-marked Questions*) は YNQ の語彙統語論的構造から一義的に句末音調の種類が予測できるか否かを表す。語彙統語論的構造にはアクセント型も含む。例えば、[+RiseMQ, -ChoiceMQ]は、疑問標識を伴う YNQ に上昇句末音調が必ず現れることを意味する。[+RiseMQ, +ChoiceMQ]は、疑問標識を伴う YNQ に上昇句末音調が用いられることも、用いられないこともあることを意味する。本稿で明らかにしたように池間方言は[+ChoiceMQ]である（16）。

- (16) a. [+ChoiceMQ] 池間, 首里, 鹿児島, 東京  
b. [-ChoiceMQ] 伊良部, 小野津, 上嘉鉄, 国頭, 伊平屋

このパラメータによって、YNQ における句末音調の機能の違いを記述することができる。この値が負の場合（[-ChoiceMQ]），形態的疑問標識を伴う YNQ における疑問は、形態的疑問標識によって標示されているので、疑問標示機能という観点から句末音調は余剰的特徴とみなすことができる。例えば小野津方言では句末音調は必ず上昇であり、上嘉鉄方言では必ず下降であるが（白田 2022），これらの句末音調は余剰的特徴である<sup>9</sup>。

この値が正の場合（[+ChoiceMQ]），疑問は形態的疑問標識によって示されているので、句末音調の選択は疑問標示以外の別の機能に基づいているとみなせる。すでに第 1 節で論じたように、同様に、鹿児島方言の形態的疑問標識を伴う疑問文には下降句末音調と上昇句末音調の双方が可能であり、句末音調が「強い応答要求」の標示・非標示という機能を有する。同様に、首里方言では疑問標識を伴う YNQ に上昇句末音調が通常用いられないが、「丁寧にたずねる時」（永野マドセン 2013: 28）には上昇句末音調が用いられるという。この場合「丁寧さ」の標示・非標示が句末音調の機能とみなせる。

<sup>9</sup> このパラメータが負でありかつ、形態的疑問標識が文末形式である場合は、観察される文末のピッチ変化はイントネーションではなく、文末形式の語アクセントと解釈できる可能性がある。それに対して伊良部方言の形態的疑問標識は文末形式とは限らない（衣畑 2020），文末のピッチ変化はイントネーションとしか解釈できない。Yokoyama (2021) は国頭方言の文末疑問標識が独自の語アクセントを有していると解釈できない理由の 1 つとして、文末疑問標識に観察されるピッチパターンが、国頭方言に認められる 4 種類のアクセント型のいずれとも一致しないことを挙げている。たしかにこの解釈は合理的であるが、文末形式が他の語とは異なる語アクセント体系を持つとする先鋭的な枠組みの可能性も探求する価値があるだろう。実際に、南琉球宮古語多良間方言の文末形式にはそれに特有のアクセント体系を仮定せざるを得ない可能性があるという（Kenan Celik 私信）。私の予備調査でも、池間方言の文末形式にはかなり固定的なピッチパターンが認められ、そのパターンの中には、池間方言の 3 種類のアクセント型のいずれかの実現と解釈するのが困難なものがある。弁別的アクセントを欠く熊本方言の文末形式に関する郡（2006）の議論は、私の誤解かもしれないが、文末形式がそれ独自の韻律特徴を語彙的特徴として有している可能性があることを指摘するものであり、前述の先鋭的な枠組みと関連しているだろう。

## 4.2 諸方言の分類

提案された4種類のパラメータによって9方言は表2のように6つの類型に分類できる。

表2 諸方言の分類

	Type 1 伊良部	Type 1 小野津	Type 2 上嘉鉄	Type 2 池間	Type 3 首里	Type 4 国頭	Type 4 伊平屋	Type 5 鹿児島	Type 6 東京
[±DQ]	-	-	-	-	-	+	+	+	+
[±RiseDQ]						+	+	-	+
[±RiseMQ]	-	-	+	+	+	-	-	+	+
[±ChoiceMQ]	-	-	-	+	+	-	-	+	+

Type 1-3（伊良部、小野津、上嘉鉄、池間、首里）は、YNQにおいて形態的疑問標識が必須の方言（[-DQ]），すなわち「平叙疑問文」を欠き、句末音調が疑問標示において弁別的でない方言である。その中でもType 1（伊良部、小野津）は、句末音調が疑問標示において余剰的であることに加えて、YNQに現れる句末音調が上昇調ではない方言（[-DQ, -RiseMQ]）であり、その点において類型論的に珍しい体系を持つ。（伊良部方言はこれに加えて、平叙文に上昇句末音調が現れる点で、非常に珍しい体系である（衣畠2020）。）

Type 4-6（国頭、伊平屋、鹿児島、東京）は、YNQにおいて形態的疑問標識が必須でない方言（[+DQ]）であり、句末音調が疑問標示において弁別的である方言である。その中でもType 4（国頭、伊平屋）は、形態的疑問標識を欠くYNQでは上昇句末音調が用いられるが、それを伴うYNQでは上昇句末音調が用いられない方言（[+RiseDQ, -RiseMQ]）であり、木部（2010）の「相補タイプ」に一致する<sup>10</sup>。

Type 3, Type 5-6（池間、首里、鹿児島、東京）は、上昇句末音調の機能に疑問標示以外の機能が含まれる方言（[+ChoiceMQ]）である。

Type 5（鹿児島）は、疑問標示において弁別的な句末音調が上昇調ではなく下降調である方言（[+DQ, -RiseDQ]）であり、類型論的に珍しい体系を持つと言える。

<sup>10</sup> 木部（2010; 2019）の「相補タイプ」とは、「疑問を表す語形式（疑問詞や疑問の文末助詞など）があれば下降調、なければ上昇調というように、語形式と文末音調が相い補うように働いているタイプ」（木部2019: 6）のことである。木部（2019）では日本語松本方言がこの類型に属するとされているが、この方言は形態的疑問標識を伴う疑問文と伴わない疑問文のそれぞれに、上昇調と下降調の双方が—機能上の差はあるが—可能なので、本稿では国頭方言と伊平屋方言が属するType 4ではなく、東京方言が属するType 6となる。Yokoyama（2021）は、国頭方言の疑問文イントネーションの分析結果に基づいて、木部（2010）の「相補タイプ」を「もし疑問が形態的に標示されるのならば下降調、そうでなければ平叙文と区別されるイントネーションを取る」（Yokoyama 2021: 273）と改訂することを提案している。Yokoyama（2021）の言う「平叙文と区別されるイントネーションを取る」という特性は本稿の[+DQ]でとらえることができる。また、木部（2010; 2019）の「相補タイプ」の本質が、その名称が示すように、「語形式と文末音調が相い補うように働くことにあるのならば、形態的疑問標識があれば上昇調、なければ下降調という類型も「相補タイプ」と名付けるべきだろう。そのような類型は、本稿の枠組みでは[+RiseMQ, -ChoiceMQ, -RiseDQ]を持つ類型ということになる。この類型に当てはまる方言は見つかっていない。鹿児島方言がこれに最も近いが、[±ChoiceMQ]の値が異なる。

4 種類のパラメータによって論理的に予測される類型の中には、在証される方言のないものがある。その一部は単純にデータ不足によるものであろうが、一部は、疑問文イントネーション体系の背後にある原理の反映の可能性がある。例えば、[+DQ, +RiseMQ, -ChoiceMQ]を持つ体系（「平叙疑問文」を持ち、かつ形態的疑問標示を持つ YNQ に必ず上昇句末音調が現れる体系）が見つかっていないのは興味深い。その検討は今後の課題である。

## 5. 結論

本稿では、形態的疑問標識を伴う疑問文とそれを欠く疑問文（「平叙疑問文」）を区別し、「平叙疑問文」の有無を検討し、同一の語彙統語的構造を持つ文で句末音調の選択が可能かどうかを検討することを通じて、疑問文イントネーションの形式面と機能面の双方を記述するという手法を用いた。この手法は、イントネーション型（具体的には句末音調）の機能の方言差を、その分布のみによって、記述できるという利点がある。この手法を用いることで、池間方言の疑問文イントネーション体系を記述し、日琉諸方言における疑問文イントネーションを二値パラメータによって類型化するための枠組みを提案した。この類型化の枠組みによって、YNQ に下降調が用いられるという、琉球諸語を中心とした一部の日琉諸方言に観察される類型論的に珍しい特質の詳細をより明確にすることが可能となった。

## 参照文献

- Carlino, Salvatore (2018a) Sentence-final interrogative intonation in the dialect of Iheya, Okinawa. 5th NIN-JAL International Conference on Phonetics and Phonology.
- Carlino, Salvatore (2018b) 「伊平屋島尻方言の疑問文の文末イントネーションについての初期報告」日本音声学会第 337 回研究例会, 甲南大学.
- Carlino, Salvatore (2019) 「北琉球沖縄語伊平屋方言の文法」一橋大学博士論文.
- Gussenhoven, Carlos (2004) *The Phonology of Tone and Intonation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 林 由華 (2013) 「南琉球宮古語池間方言の文法」京都大学博士論文.
- 五十嵐陽介 (2016a) 「南琉球宮古語池間方言・多良間方言の韻律構造」『言語研究』150: 33–57.
- 五十嵐陽介 (2016b) 「名詞の意味が関わるアクセントの合流：南琉球宮古語池間方言の事例」『音声研究』20(3): 46–65.
- 五十嵐陽介 (2021) 「日本語諸方言のイントネーションと言語類型論」窪田晴夫・野田尚史・プラシャントパルデシ・松本曜（編）『日本語と言語類型論』22–48. 東京: 開拓社.
- Igarashi, Yosuke, Yukinori Takubo, Yuka Hayashi, and Tomoyuki Kubo (2011) How many tonal contrasts in Ikema Ryukyuan?. *Proceedings of the 17th International Congress of Phonetic Sciences (ICPhS XVII 2011)*, 930–933.
- 五十嵐陽介, 田窪行則, 林 由華, ペラール トマ, 久保智之 (2012) 「琉球宮古語池間方言のアクセント体系は三型であって二型ではない」『音声研究』16(1): 134–148.

- Igarashi, Yosuke, Yukinori Takubo, Yuka Hayashi, and Tomoyuki Kubo (2018) Tonal neutralization in the Ikema dialect of Miyako Ryukyuan. In: Haruo Kubozono and Mikio Giriko (eds.) *Tonal Change and Neutralization*, 81–128. Berlin: Mouton De Gruyter.
- Jun, Sun-Ah (ed.) (2014) *Prosodic Typology II: The Phonology of Intonation and Phrasing*. Oxford: Oxford University Press.
- 木部暢子 (2000) 『西南部九州二型アクセントの研究』東京: 勉誠出版.
- 木部暢子 (2010) 「イントネーションの地域差—質問文のイントネーション」小林隆・篠崎晃一 (編) 『方言の発見：知らざる地域差を知る』1–20. 東京: ひつじ書房.
- 木部暢子 (2019) 「疑問文の文末音調による系統内類型論の試み—イントネーション研究のために—」『国語と国文学』1142: 3–13.
- 衣畑智秀 (2020) 「宮古伊良部集落方言の音調」『福岡大学日本語日本文学』29: 43–58.
- 郡史郎 (2006) 「熊本市および周辺の非定型アクセント方言における語音調と音調句の形成」『音声研究』10(2): 43–60.
- 窪薙晴夫 (2021) 『一般言語学から見た日本語のプロソディー：鹿児島方言を中心に』東京: くろしお出版.
- Ladd, D. Robert (1996) *Intonational Phonology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 永野マドセン泰子 (2013) 「南琉球・宮古伊良部島にみる無アクセント方言のイントネーション」『琉球の方言』37: 25–43.
- 永野マドセン泰子・狩俣繁久 (2010) 「首里方言のイントネーション」『琉球の方言』34: 175–191.
- 白田理人 (2022) 「北琉球奄美喜界島方言における動詞アクセント単位の拡張」窪薙晴夫・守本真帆 (編) 『プロソディー研究の新展開』214–235. 東京: 開拓社.
- Ultan, Russell (1978) Some general characteristics of interrogative systems. In: Joseph H. Greenberg, Charles A. Ferguson, and Edith A. Moravcsik (eds.) *Universals of human language*, Volume 4, Syntax, 121–248. Stanford: Stanford University Press.
- Yokoyama, Akiko (2021) The interrogative intonation in the Kunigami dialect of Okinoerabu, Ryukyu. *Journal of Japanese Linguistics* 37(2): 259–274.